

横山ゆずり作 『心の鎖が解けた時』

<前編>

(教会。礼拝の会衆賛美)

司会者 これで礼拝を終わります。ご自由にお交わりください。

(ガヤ)

原 伊藤さん、伊藤姉妹。

幸江 あ、原姉妹。おはようございます。

原 今日は礼拝のあとで婦人会のある日だけど、伊藤さん、出られる？

幸江 ええ、出席します。

原 ご主人の方、いいの？

幸江 今日ね、主人、ゴルフなの。だから少しゆっくりできます。

原 じゃ、またのちほどね。

青年 伊藤さん。今度、青年会が主催で中高生のための伝道会を開くんですよ。これ、チラシなんで、よかったら息子さんにあげてください。もうしばらく会ってないですけど、中学生でしたよね。

幸江 ええ、そうです。ありがとう。

<タイトル>

幸江N わたしは伊藤幸江と申します。夫と、中学生の息子と暮らす主婦です。まだクリスチャンではありませんが、毎週日曜日には、家から歩いて15分ほどのところにある、このキリスト教会の礼拝に出席させていただいております。若いころミッションスクールに通っていたこともあり、10年ほどまえ、子育ての悩みをきっかけにこの教会に来るようになりました。夫も信仰は持っていませんが、幸い、わたしの教会通いには理解を示してくれています。

(家のドアを開ける音)

幸江 ただいま。あら、ヒロシ、帰ってたの？

ヒロシ あ、母さん、お帰り。今日は教会、結構遅かったんだね。

幸江 うん、ごめんごめん。今日は一日中部活かと思ってたわ。昼ご飯はちゃんと食べたの？

ヒロシ カップラーメン食った。部活は何か頭が痛くて、早退しちゃったんだ。

幸江 あら、大丈夫？

ヒロシ うん、ヘーキヘーキ。

N そして、その日の夕食の時のことです。

(食器の触れ合う音)

夫 いやあ、今日は参ったよ。途中までは調子よかったんだけどなあ。

幸江 まあまあ、いつも途中までは調子がいいんですよね、お父さんは、
夫 そう言うなって。いつかはきっとホールインワンだってキメてやるからな。ヒロシの方はどうなんだ。サッカー部の方は、
幸江 それがね、今日は何か具合が悪くて早退してきたんですよ。
夫 何だ、風邪か？ 食欲はあるようだな。大丈夫か？
ヒロシ うん、別にもう何ともないよ。
夫 そうか？ おっ、お前いい時計してるなあ。そんなの買ってやったことあったっけか。
幸江 あらほんと。全然気がつかなかったわ。どうしたの、それ？
ヒロシ え、前から持ってたよ。
幸江 あら、お母さん見たことないわよ。ちょっとよく見せてみて。
ヒロシ え、いいよ。自分で小遣いのために買ったんだよ。安物だよ。...ごちそうさま。
夫 何だ、もういいのか？ ヒロシ、おいヒロシ。
(ヒロシ、階段を駆け上がり、自分の部屋の戸を閉める。)
夫 母さん、何かあいつ、変じゃないか？
幸江 そうですね。最近時々変なときがあるんですよ。妙に上の空だったり、急にはしゃいでみたり。...まさかあなた、あの子、学校でいじめに遭っている、なんてことはないでしょうね。
夫 うーん、それはないだろう。第一、あいつの体格じゃ、上級生とだってそう変わらんだろう。
幸江 そんなのんきな。最近の子はね、やることが陰湿で知能犯なんですから。大きな体の子だっていじめられることがあるんですよ。気をつけてやらなくちゃ。
N 後になって思えば、そのころから兆候は表れていたのです。でも母親であるわたしは、まさか我が子に限って、という気持ちから、ヒロシの本当の姿を見ようとしなかったのです。それから数日たったある日のこと。
(電話呼び出し音)
幸江 はい、伊藤でございます。はい、はい、ヒロシの母でございますが。...ああ、青春中学2年B組の、矢口君のお母様ですか。いつも息子がお世話になっております。...え、あの、どういうことでしょう。恐れ入ります、おっしゃる意味がよく分かりませんが。はあ、はあ...。
N それは、ヒロシの同級生の矢口和夫という子の母親からでした。
矢口の母(フィルター音) ですから、お宅の息子さんが、1か月ほど前から、うちの子に随分と無理なことを言ったりしたりしてるそうなんです。うちの子、ことのところ下ってやったばかりのものを「なくした」って言ったり、顔にアザつくって帰ってきても「ふざけてて、ぶつけた」というきりだったんですけど、あんまり目につくんで問い詰めたら、「伊藤君にいじめられてる」って言うんですね。もちろん、こっ

ちの一方的な話では納得できないでしょうから、そちらでも息子さんにちょっと聞いてみていただけますか。こないだもね、お年玉で買ったばかりの腕時計をなくしてきたんですよ。

幸江(モノ)
N

まさか、まさかそんな。ヒロシがよその子をいじめるなんて、そんな…。とても信じられない話でした。いえ、信じたくない話でした。けれども、そのままやむやにになってしまうわけにはいきませんでした。

(ヒロシの部屋のノック音)

幸江
ヒロシ
幸江

ヒロシ、いるの？ おかあさん入るわよ。

何？

今日、あなたが学校に行っている間に、矢口君っていう人のお母さんから電話があったの。その子、あなたにいじめられてるって言ってるらしいわ。親御さんも、ヒロシがその子のものを取ったり、殴ったりしてるように言うのよ。どうなの？ あなたまさか、そんなことしてないわよね？ おかあさんだけには本当のこと言ってちょうだい。神様は全部知ってるのよ。

ヒロシ
幸江

…

何とか言ってちょうだい！ お母さん、あなたの言うこと信じるから。

ヒロシ

…あいつが悪いんだ。もともとあいつが、サッカー部に入りたいって言うから、半端な時期だけど、おれが先輩に紹介してやったんだ。それなのに、練習がキツイからやっぱりやめたいなんて。おれの顔が丸つぶれじゃないか。だから… だから少し鍛えてやろうと思ったんだよ、甘ったれた根性を。それに、物なんて取ってねえよ。

幸江

じゃあ、あの腕時計はどうしたの？ この前はめてた新しいの。あれ、矢口君のなんでしょ？

ヒロシ

…預かっただけだよ。矢口のやつ、怖がってるやつがいて、自分で持つと取られるから、おれに預かってくれて言ったんだよ。

幸江

本当なのね？ 本当にいじめたり物を取ったりしてないのね？

ヒロシ

してないったら。信じてよ、おれのこと。

幸江

分かったわ。お母さん、ヒロシの言うこと信じる。このまま誤解されっ放しじゃ嫌だから、お母さん、ちょっと学校へ行ってくるわ。相手に直接言うより、担任の先生から言ってもらった方がいいでしょ。

ヒロシ

ちょっと待ってよ。話が大きくなるよ。いいってば、そんなこと言わないで。

幸江

何言ってるの。このままじゃ、あなたはいじめの張本人だと思われるのよ。冗談じゃありません。ちょっと行ってきますから。

ヒロシ

あ、待って、待ってよ、母さん！

(母が玄関を出ていく音)

ヒロシ(モノ)

…やべえ。

(ガヤ)

担任 そうですか。矢口さんから直接お宅に連絡が行きましたか。学校側から早くお知らせすべきだったかもしれませんが...

幸江 はい、わたしもとしまして、子供同士のことですから、親が出ていってもとは思いましたがあらぬ誤解を受けていじめの張本人のレッテルをはられては、あまりにもかわいそうだと思います。それで伺ったんです。

担任 お母様は、あくまでもヒロシ君はやっていないとお考えですか？

幸江 え？ どういう意味でしょうか。

担任 ちょっと見ていただきたいものがあるんです。

N そう言って担任の先生が取り出したのは、ズタズタに引き裂かれた体操着のようでした。

担任 矢口という生徒のものです。何週間か前、サッカー部の部室のゴミ箱から出てきました。

幸江 うちの子がやったと？

担任 伊藤君のテストの答案と一緒に丸めて捨てられていました。

幸江 だからって、うちの子が犯人だという証拠になるのでしょうか。

担任 もう一つ、これ、お分かりになりますよね。

N それは、一面に「死ぬ」だの「殺してやる」だのという汚い言葉が殴り書きされた、スケッチブックでした。そして、その書かれた字は、右肩上がりの特徴のある、紛れもない息子ヒロシのものでした。わたしは言葉を失っていました。

担任 お母さん、はっきり申し上げます。残念ですが、ヒロシ君は矢口という生徒に対して、いじめを行っています。

(ショッキングな音楽)

<後編>

担任 最近、何かご家庭で問題になるようなことはありませんでしたか？ 本人がいじめに走るような大きなストレスとか...

N 担任の先生の声がどこか遠くで聞こえているようでした。勉強や成績のことできつくしかったことは一度もありませんでした。いい学校に入らなくてもいい。ただ思いやりのある、明るく素直な子に育ててほしいと、それだけを願って、必死に、祈りながら育ててきた我が子が、よりによって、平気で人を傷つけるような子になっていたなんて。

<タイトル>

N どこをどう歩いて帰ったのかも覚えていません。事態を察してか、ヒロシも一歩も部屋から出てこようとしませんでした。その夜、まんじりともできずに夜が更けていく中で、わたしは何度も息子が生まれた時からのことを思い起こして

いました。
(回想)

ヒロシ(幼児) ママ、ママ、見て！ パパ、見て！
幸江 どうしたの？ ヒロシちゃん。
ヒロシ あのね、ママ。アリさんなの。アリさんいっぱいいるの。
夫 どれどれ。お、ほんとだ。何かみんなで運んでるぞ。
ヒロシ あ、パパ、そこ踏んじゃダメ。アリさんが通れなくなっちゃう。アリさんがかわいそうでしょ！
夫 ああ、ごめんごめん。ヒロシはアリさんたちを守ってあげてるのか。優しいなあ、ヒロシは。(エコー数回)
(回想終わり)

幸江(モノ) そうよ。ヒロシちゃん、あなたは昔から本当は優しい子だった。それなのに、こんなことになったのは、お母さんのせいだわ。お母さんが悪いの。みんなお母さんが悪いの。ごめんね。ごめんね。お母さんが悪いの。お母さんが罰を受けなくちゃいけないんだわ。みんなお母さんが悪いんだから…。

N わたしは、まるでうわごとのようにつぶやきながら、気がつくといろしのまくらもとに立っていました。右手にはしっかりと果物ナイフを握り締めて。そのナイフで何をしようと思ったのかは、自分にも分かりません。ただ、自分もヒロシも今傷つけば、人に与えた傷を少しでも償うことができる、そんな風を感じてしまったのかもしれない。

幸江(モノ) ヒロシちゃん、ごめんね。お母さんが悪いの…。
ヒロシ (母の気配に気づいて目を覚まし、母の手のナイフを見て跳び起きる。) 母さん！ …本気なの？
幸江 聞いたわ、先生から。何もかも。
ヒロシ なら、分かったんだろ、もう。おれは父さんや母さんが思ってるようないい子じゃないんだよ。怒ればいいだろ。刺すなら刺せよ。
幸江 違うの、ヒロシちゃん。悪いのはお母さんよ。あなたをちゃんといい子に育ててあげられなかった。お母さんが罰を受けなくちゃいけないの。
N わたしは果物ナイフを左腕に当てると、スーッと刃を引きました。
幸江 ほら、見てごらん。きれいな血でしょ。お母さん、ちっとも痛くないわ。もっともってお母さんの血が流れれば、矢口君はあなたのこと許してくれるかしら。
ヒロシ ダメだ、やめてよ母さん。危ない！(2人、もみ合う。)
幸江 止めないで、ヒロシちゃん。
ヒロシ やめて、母さん。危ない！
2人 あー！ キャー！
夫 (階段を駆け上がってくる) どうした！ 母さん、ヒロシ、しっかりしろ！

(救急車のサイレン)

<病室>

- 夫 母さん、...気がついたか。
- 幸江 あなた...ここは？
- 夫 病院だ
- 幸江 病院？ そうだわ、わたし。ヒロシの部屋にナイフを持って上がって行って...。
(ハッとして)ヒロシは？ あなた、ヒロシはどうしたんです？
- 夫 落ち着きなさい。あの子は無事だ。
- 幸江 そうだわ。あの子、わたしが自分の腕にナイフを当てるのを見て、それをやめさせようとして...。
- 夫 ああ。お前からナイフを取り上げようとして、刃の方を握り締めたらしいな。かなり出血したが、神経は切れていないそうだ。ただひどく興奮していたので、鎮静剤を打ってもらって、今はぐっすり眠っているよ。
- 幸江 わたし...何ていうことをしてしまったんでしょう。本当に、本当に母親失格だわ。
- 夫 そうやって自分を責めるのはやめなさい。さっきも随分うなされていたぞ。「ごめんなさい、ごめんなさい」って。
- 幸江 わたし、そんなこと言ってました？
- 夫 ああ。「ヒロシちゃん、ごめんなさい。神様ごめんなさい」って。
- 幸江 そうですか。...謝って済むことじゃないですよ。(ため息)
- 夫 幸江。...そうだ、さっきまで教会の方が来てくださってたぞ。救急車がうちの前で止まったんで、心配して来てくれたそうだ。今夜は疲れているだろうから、また落ち着いたころ、見舞いに来てくださると言って、お祈りをして帰られたよ。
- N 翌日、ヒロシはわたしの病室に顔を見せると、退院していきましたが、わたしは神経科の検査を受けた方がよいということで、入院することになりました。教会の牧師と婦人会の原姉妹が見舞ってくださったのは、次の日のことでした。
- 牧師 やあ、伊藤さん。思ったより顔色がいいですね。
- 原 伊藤さん、びっくりしたわ。いろいろ大変だったでしょう。無理して話さなくてもいいからね。ただ一緒にお祈りしようと思って、お邪魔したのよ。
- 幸江 先生、原さん。すみません、ご心配かけて。
- 牧師 いやいや、心配かけられるのが牧師の仕事みたいなものですから。気を遣っちゃいけません。
- 原 そうよ、伊藤さん。気を楽にしなきゃ。
- 幸江 わたし、とんでもないことをしてしまったんです。もう教会に行く資格もありません。

せん。

原
牧師

伊藤さん…。

伊藤さん。もし、しっかりとした弱点のない人だけが教会に来る資格があるのなら、だれも教会に来られなくなってしまう。第一、わたしだって牧師をしている意味がない。教会は、弱い人たちのための場所なんです。イエス様がこうおっしゃってます。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなた方を休ませてあげます。」(マタイの福音書 11:28)

幸江
N

先生…。

わたしは、その牧師の言葉に、硬くこわばっていた心が少しずつほぐされていくのを感じ、お二人に、今までのこと、自分の心のうちを聞いていただいたのです。

牧師
原

そうだったんですか。本当につらかったでしょうね。

伊藤さん。あなたって本当にまじめなのね。だからなおさら一人で苦しんでしまったのね。

幸江

先生、原さん。わたしは特にできることがあるわけじゃないし、仕事も持っていません。ただ主婦として家の中のことと子育てだけに専念してきました。でも今回のことで、自分の唯一の支えであった子育てが失敗だと思った時、もうどうしようもなく自分のすべてが否定されたような気持ちになってしまって、それで…。

原

伊藤さん。子育てに失敗したなんて言っちゃダメよ。ヒロシ君のしたことは、それは大変なことかもしれないけど、だからと言って自分を責めてはダメ。ヒロシ君だって、きっと今回のことを通して成長していくはずよ。それに、あなたをかばおうとしてケガしたっていうじゃない。優しい気持ちもちゃんと持ってるのよ。

幸江
牧師

原さん…。

伊藤さん。子育ても、もちろん自分育てもそうですけれど、本当に自分のダメさ、弱さを知ったときに、心の中にイエス様をお迎えすることができるんですよ。そして信じたときに、心の中に入ってくるイエス様が、わたしたちに内側からの力を与えてくださるんです。聖書には、こうも書いてあります。「わたしのめぐみは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである。」(コリント人への第2の手紙 12:9)

伊藤さん。さっき、「教会に来る資格」とおっしゃったでしょう？ 資格なんて何にも要らない。もし要るとすれば、それはただ一つ。「自分の弱さを素直に認める」ということです。でないと、イエス様の働く場がないんです。イエス様の力は、今のあなたの弱さの中に、完全に現れるんですよ。そのまんまで、重

荷を全部、イエス様にお任せしてみませんか？

N

その時、心の中にスーッと入ってきた安らかさを、何と表現したらいいのでしょうか。締め付けていた心の鎖が、すべて解き放たれたようでした。「この方にお任せすればいいんだ。」わたしは心の中で、何度もそうつぶやいていました。

(完)